:本密教における舎利と宝珠

苫米地

誠

はじめに

稿と一つに合わせて、以下に述べたいと思う。 浄土往生の問題について改めて少しく論じた。 発表「中世の密教儀礼と舎利信仰」においては、 ては今のところ公開の予定がない。 と宝珠」という題で発表したが、 二〇一三年四月に中国陝西省法門寺で「法門寺仏舎利研究シンポジウム」 原稿の中国語訳だけが予稿集として編集され、また今後出版の予定であるが、 また二〇一五年九月二十日の高野山大学における日本印度学仏教学会第66回学術大会のパネル 今回、 法門寺における発表を前提として(重複する部分もあったが)、 印仏学会の発表を原稿化するに当たって、先の法門寺舎利シンポジウムの が開催された。 そこにおいて「日本密教における舎利 舎利の功徳による 日本語原稿につい

わ であるが、 て浄土往生の説かれることがある。 修寺流・随心院流)にも言及されるが、 教学や文学研究、 れるようになり、 れる。 てい 同 ところで日本密教では、舎利と宝珠を同体視する教理が形作られている。またそれによって日本独自の宝珠形の舎利容器が作ら .体観についても検討されている。 ないようである。 またそこには宝珠と『法華経』、『法華経 日本成立の偽経とされる『金輪呪王経』において舎利と宝珠の同体説の上に往生が説かれ、 思想研究の立場からも、 近年では内藤栄博士の御研究 (-) に代表されるように美術史・工芸史研究の面からの研究も進んでいる。 しかし実際には広沢流にも、 その最初期に位置すると考えられるのが興教大師覚鑁(一〇九五~一一四三)作 全般的に醍醐流の伝承説を中心に考究され、また醍醐流と共に狭義の小野流 真言宗広沢流や天台宗 能作性の宝珠や宝珠法に関わる研究が多く見られるようになり(②、そこでは舎利と宝珠 』と阿弥陀如来・ 台密にも、 (台密) における舎利・宝珠同体観についてはほとんど取り上げら 共に舎利・宝珠同体説は伝承されている。 観自在菩薩との同体説も関係していることも考えられる。 その成立が院政期初頭と思 また仏舎利の功徳とし (安祥寺流 『舎利講式』 また仏

よる往生の 日本密教において舎利 問題に注 目して検討してみたい 宝珠同 一体観が説かれることにより、 どのような事態が起こってい るのか、 その中でも舎利=宝珠 *о* 功

二、『御遺告』における能作性の如意宝珠と舎利

られる。 れば、 関する言説 による室生山相奪をめぐる問題も、 仁和寺方勢力による東寺長者職を通じての他寺管領を目論むものであったことを推定した。また武内氏の指摘される興福寺と東寺 ほぼ十世紀半ばの九五○年頃と推定された。 が実際には空海 人工的に作る事が可能なもの」ということであり『御遺告』では舎利を中心に込めた宝珠の作り方が説かれている。 に指 そこに説かれる能作性の如意宝珠に関する言説も、 摘されるように弘法大師空海 日本密教において舎利と如意宝珠の一体説を記録する最初のものであろう。 のもので無い事は既に定説であるが、 同じ視点から解釈できよう。 (七七四~八三五) また拙考では背景として香隆寺僧正寛空(八八四~九七二)の東寺長者補任をめぐり、 その成立時期については拙考 (3) ならびに武内孝善博士の御論考 やはり仁和寺方(従って広沢流) の言葉とされる二十五箇条の ともかく『御遺告』 が仁和寺方の中で作成されたものであるとす 『御遺告』 「能作性」とは「(真言密教の阿闍梨が の中に伝承された可 に説か れる能作性 能性が高いと考え この (4) によって 『御遺告』

彼の色を簡わず。 白檀十両 如来の分身」というのは真実の如意宝珠であり、 白 一の如来の分身であって龍肝 御遺告』では「一、 いうのが は九種 <u>E</u>. 能 の中に入っていないが、沙金と合わせて百両なのか、 百心樹沈十両 作性 唯だ清浄を以て之れを用う)(九) 0 玉 東寺の座主大阿闍梨耶、 であり、 子 鳳脳等ではないとし、 桑木沈十両 その作り方は(一)仏舎利三十二粒 七 如意寶珠を護持す可き縁起第二十四」(5)において、 祖師大阿闍梨の口訣に任せて成生する玉である、 漢桃木沈十両という九種の物を用い 桃木沈十両 これを龍肝・ 沙金の代りに白銀なの $\widehat{\underline{\mathcal{N}}}$ 鳳脳とするのは大なる虚言であるとする。 大唐香木沈十両 <u>-</u> 未だ他色に用いざる沙金五十両 か、 る。 (謂く香木沈とは專ら名香木の沈を以てす。 が明らかではない)をもって壺を作る この中の沙金五十両と白銀五十両 とする。ここで「成生する玉 如意宝珠は無始以来、 そして 紫檀十両 自 I 然道 自)理の 然道 四

無 一数の

は 珠 法

また

L

龍

更に

宝珠 ただし、 (真多摩尼 Cintāmaṇi) そもそも舎利と宝珠の同体説自体はインド仏教全般に共通の認識であり、 の働きについて、 一例として『大智度論』 の記事を上げると 大小 ・乗の諸経論に広く説かれる。 ここで如

又摩尼珠の如きは人の欲する所に随ひて種種に之れを与ふ。 若し衣被飲食音楽を欲せば、 自ら恣に須ひる所自然に皆得。

とされ、 また

意珠は能く一由旬に雨す。 如しは菩薩の先世に国王の太子為りしに、閻浮提の人の貧窮なるを見て、如意珠を求めむと欲ひ大海に入りて龍王宮に至る。 て三由旬に雨す。 太子の威徳殊妙なるを見て即ち起ち迎へ逆に前供養を延ぶ。而るに之れに問ふて言く、何ぞ能く遠く来たるや。太子答へて曰く、 て閻浮提に至る。 閻浮提 の衆生を憐れむが故に、 (中略) 珠は能く飲食を雨し、 諸龍、 (中略) 珠を与へ已て言く、汝の寿命尽きれば、 時に太子、復一の龍宮に至りて珠を得て二由旬に雨す。(中略) 如意宝珠を求めて以て之れを饒益せむと欲ふ。 珠は能く衣服を雨し、 一珠は能く七宝を雨して衆生を利益す。 珠当に我れに還るべし。 龍の言く。 (中略) 菩薩之れを許す。 復一の龍宮に至りて珠を得 龍即ち珠を与ふ。 7 太子珠を得 是 の 龍 如

とあって、 如意宝珠は飲食・衣服・音楽・七宝などの人の求める物を、 求めるに従って出すものとされる。 或い は

言く、 宝珠に二種 の宝は常に能く一切の宝物を出す。 略)此の宝珠を如意と名く。 法既に滅尽して、舎利変じて此の珠と成り、以て衆生を益すと。 間 ふて曰く、 脳中従り出づ。 是れ帝釈の執る所の金剛を用て阿修羅と闘ふ時、 有り。 摩尼宝珠は頗梨金 天上の如意宝有り。 人此の珠を得れば毒も害すること能はず、火に入るも焼く能はず。 定色有ること無く、 銀 中 衣服飲食、 人間の如意宝有り。 略 金剛等の中に於て是れ何等の宝なるや。 意に随ひ欲する所尽く能く之れを与ふ。 清徹軽妙にして四天下の物皆悉く照現す。 閻浮提に砕け落ちるなりと。 諸天は福徳厚きが故に珠徳具足し、人は福徳薄きが故に珠徳具足せず。 有る人の言く、衆生の福徳因縁の故に、 答へて曰く、 有る人の言く。 亦能く諸々の衰悩病苦等を除く。 是くの如き等の功徳有りと。 如意珠の義は先に説くが如し。 有る人の言く、 諸々の過去久遠の仏舎利 自然に此の珠有り。 此 の宝 有る人の 一珠は龍 中 是

自然に在るもの、 ともされてい が薄 0 る。 で、 という他に、 その宝珠の のように衆宝を雨ふらす如意宝珠には、 力 過去久遠の仏舎利が変じて如意宝珠となった、とする日本における舎利・宝珠一体説の淵源が見ら 功徳も完全ではないとされる。 天上の如意宝珠と人間の如意宝珠があるが、 またここでは如意宝珠の 由来として龍 王 人間の 一の脳、 如意宝珠は、 帝釈天の金剛杵 人の

云々」

意宝珠という事であろうが、ここでは祈雨において本来は龍の果たすべきであった役割を如意宝珠に置き換える事によって、 また一方で神泉苑の祈雨のように、 うに思われる。 n 意宝珠を納めた空海 を出し その祈 与える」という功能を持つものであろう。 ともかく『大智度論』だけではなくインド仏教における如意宝珠は、龍脳や舎利より生じ、『御遺告』 におけるそれのように 「善 (慈雨を降らせて) 雨儀礼が効力を有する根拠・ もちろん『大智度論』(インド仏教)にしろ『御遺告』にせよ、如意宝珠そのものが既に龍と深く関係づけられており、 (弘法大師) 万物を利益する の室生山における重要性を強調しているように思われる。 祈雨においては元来、 理由付けとして説かれているといえ、 (五穀を豊穣にする)」というものではなく、 『御遺告』における如意宝珠=舎利の功徳・働きは、 龍が重要な役割を果たしており、 国家的な安寧を求めるものへと限定され もっと即物的に それらが結び付いたものが室生山 室生山における祈雨を背景と 「何でも欲しい物を出 7 そ . の 如

祈 置 0 福だから宝物を雨ふらさない」 となるのは薄 智度論』 に用ひて知らず。 丽 |き換えることにより、 言 衆生が薄福だからであり、 に云く、 これに対して小野 0 効験に特化せしめたのではないだろうか。 訳 によれば菩薩 のようにしか感ぜられ 実に薄福の者の為に暫く宝を雨さずと雖も、 福 前 猶し壤父の帝の力を忘れたるが如し歟」 世 僧都成尊 一での (前世の釈迦) 東寺長者が室生寺を管領せんとすることを目的にしてい 善根 代りに善風を出して五穀豊穣ならしめることで衆生を利益している、 (一〇一二~一〇七四) というのは矛盾をしているように思われるし、 ない。 が薄い) は衆生が貧窮のために、 や はり だからであり、 『御遺告』 撰 は その衆生の為に衣食宝物を雨ふらせることができる如意宝 自然に善風を出して常に万物を生長す。 『真言付法纂要抄』の「六 (9) とされる。これは室生山の如意宝珠 室生山 龍宮より如意宝珠を借りてきて宝物を雨ふらせている。 における祈 雨修法 この成尊の主張も、 たたため 宝珠殊勝」 0 では 効 験の な 源を空海 では 則ち是れ無為の徳なり。 か。 というのであるが、先に見た が衣食七宝などを雨ふらさな 現実の宝物を雨ふらさないこと その 『御遺告』 0 ため 納めた如意宝珠 如意 を引きな 珠 宝珠 が 衆生が貧窮 「衆生 百 が 0 0 威 姓 5 威 力を グカに 一が薄 は 大

0 \mathbb{H}

三、護国的修法における舎利・如意宝珠

との関 法 御修法を代表として、舎利=如意宝珠の役割について別の事は語られないようである。 いと考えられる。 (国家的な安寧を得るため、 わりの中で説かれるだけのようである。 における舎利と如意宝珠 醍醐流における修法口訣における如意宝珠については中村本然氏(1)によって整理されているが、 | 禳災招福のための修法とでも言おうか)| であり、そこにおける如意宝珠=舎利の役割は変っていな の 一 体説と修法については先行する諸論に扱われているが、 しかし後七日御修法にしても請雨法にしても 『御遺告』におけると同様な護国 おおむねはただ一 体である事 やはり後七日 0 修

覚洞院勝賢(一一三八~一一九六)が記して守覚法親王(一一五〇~一二〇二)に伝授したとされる『秘鈔』 の

îì

 \Box 如意宝珠と成り、 舎利を箱に納めて之れを安置す。 伝に云く、 其の宝珠は大龍の果報に依て力用を施し降すと云云。舎利を供する時、 道場観の時、 雲雨を四方に起して、 本尊観を畢って此の観を作せ。謂く毘盧舎那仏、釈迦牟尼仏と成る。 即ち之れを宝と観ず。又宀一山と一体之旨、 普く世界を潤し水陸之情・非情を利益す。 同じく此の観を作す。 観念す可き也。是れ最秘なりと云云。 龍王、此の宝珠に依て威光を増し、 人天を度せむが為に、 遣告の意也。 大壇 釈迦 雨を 即

とされるのは、応に『御遺告』と同じであることを主張するものであろう。

~一二三六)記とされる『遍口鈔』 宝珠と宝生如来とを結びつける記録はこれが早いであろうか。 三弁宝珠と壇上の仏舎利(恵果付嘱・空海請来の東寺の仏舎利)と宀一山 界に修するが、金剛界では宝生如来を本尊とし、 鈔』 より遡って元海(一○九四~一一五七) 0) 「後七日法事」 (3) には「故僧正の口伝に云く」として、仁和寺と醍醐寺の両流共に同じく修 胎蔵界では宝生菩薩を本尊とする。 の『厚造紙』(2)では後七日御修法について、 また宰相僧正遍智院成賢(一一六二~一二三一)口・道教 (室生山)の宝珠との三を一体に観想するとされる。舎利 金剛界の時、 本尊宝生如来の三昧耶形である 宝生如来の法であ

七日御修法と一 尊とし するが、 宝珠と結びつけられ 勝王経法と習う 仁王 増益には吉祥天を本尊とする。 経 を転 体である宮中御 Ó 法 てい が 輪 甚 の 二 深の 一法は醍 義であるとされ 斎会で講じられる 醐 0 また不動は即ち堅牢地神であり、 習いが増さっており、 『金光明最勝王 『金光明最勝王経』 経 孔雀経と後七日は仁和寺が増さっているとする。 0 の修法を後七日御修法の義とするとされ、 「堅牢地神品」「吉祥天女品」 吉祥天はまた宝珠であるからだ、 に出ており、 とされる。 堅牢 更に此 息災には 地神と吉 ここでは後 0 不動 法 0 肝

間 眼 る護国的修法である事 伝承され 愛染二明王を脇侍とする三尊合行の修法が知られるが、 利と不動・愛染了 更に孔雀明王の半身が赤と白の尊が有り、 染・舎利不動とは此の孔雀明王の事であるとする。 を習合することとする。 0 蘇 は不動・ また仁和寺流 には、 父母の如くであり、 息の義 ている。 孔雀明王の事に宗家の大事があるとし、 胎 界で金 金輪には調伏の義が有る。 (広沢流) 一明王の結びつきを示すものとして注目されよう。 その 一輪は愛染・ からす 口訣の一 母父の慈が和合して生ずる、これが仏眼・金輪三昧である、 孔雀は不動であり、 の修法とされる孔雀経法をめぐって仁和寺第六世喜多院御室守覚法親王 'n ば 端が 金界であり、 舎利愛染・舎利不動の舎利は 『追記』に見られたものといえよう。 字金輪が舎利を調伏し、 これは一 諸尊の悉地は不動・愛染の悉地であるとする。 明王は愛染であり、 殊に当流 一明王合体の由であるとされる。 孔雀の尾光の宝珠は、 不動・ (仁和御流) 愛染二明王の事は醍醐流に限られず、 二明王が不二であるのを孔雀明王と称するとする。 『御遺告』と同様な約割を果たしているものと推測され 醍醐流には如意宝珠形舎利容器に入った舎利を本尊とし、 仏眼の助生によって蘇息する。 に深奥の習いが有って、 a ただ孔雀経法は主として請雨・ 阿 字が能く dhātu また諸尊の行法にみな仏眼・金輪呪があ とされる。これは広沢流の口訣であるが、 この真言を成就吉祥呪と名 その秘伝とは不動と愛染の (一五()) 仏眼 (駄都=舎利) 広沢流はもとより、 の明王と金輪の明 止雨の修法として修され を生ずるとさ そして舎利愛 0 究王とは け、 台密にも ń 不動 追 明 記 仏 世 眼 É

捉 ~一一二九) え、 (八識又は六識 赤白二渧 倉時 の作に仮託される小野・醍醐流 代中 和合して託胎するが、 崩 は 領の 両部不二の一 成立と考えられる 仏であるとする。 赤 (経 血 の秘義の口伝書であるが 『最後潅頂常行心要法』 は母 さらにそれに一 の婬=胎蔵大日であり、 仏二 は小野僧都成尊 <u>15</u> 明王の習 「受生処胎成仏の義」では子供の生まれる過 白 (精 41 液 が (一〇一二~一〇七四) あ は父の骨=金剛界大日であっ ń 赤は愛染明 至 又は勝 白 は不動 覚 て 明 程を成仏と 王 中 有 中 有

の識 こで舎利法に就く義の内容がはっきりしないが、 ように、 は阿弥陀仏であるとする。 舎利による浄土往生が願われる場面では、 またこれに舎利法に就く習いがあり、 阿弥陀と舎利が入れ替われば、 舎利と阿弥陀の入れ替わり、 数義があるが、 即ち同体説は当然とも言える。 舎利を中心とした三尊合行法となろう。 全て自宝が仏である事を示す、 とされる。こ

これらに対して興福寺上座・清水寺別当阿闍梨定深(一○四六~一一二○)の撰とされる『十八契印義釈生起』

持する者の所に雨す。 謂く如意珠宝は是れ仏舎利の所変也。 又此の如意珠に種種の色有り。 能く財穀種種珍宝を雨し衆生を利益す。 色に随て用を異にす。 或は病患を除き、或は凶孼を消し、或は宝を雨す也 而るに悪を好む者の所に雨すに非ず。 唯だ戒を

是くの如き等の種種の利有り

<u>16</u>

てみれば とあるのはこれらと異なって、『大智度論』などに見られるようなインド本来の如意宝珠の概念であるといえようか。 一般的な舎利の説明は、 かえって日本密教としては珍しいものとなっているといえよう。 定深のこの

四、覚鑁の『舎利講式』と往牛

次に舎利の功徳による往生という事では、 興教大師覚鑁作とされる『舎利供養略式』(一段式)

到らむ。 示すと雖も、 自性法身大日如来、 如来の広恩、 大悲休まずして尚舎利を留めたまふ。 大悲の心に住して自楽の都を起ち、 駄都の深徳、 不可思議なるものか。 信楽帰依の人は必ず三有の苦海を渡り、 応化の身を現じて他利の門に趣き 中 供養称讚の類は定で四徳の楽岸に 略 而るに化縁既に尽き滅度を

摩尼の供養を儲けて白玉の舎利を献ず。 上生兜率の勝行、 頓証菩提の妙行。 之れにしくはなし。

此の生身の舎利は即ち彼の法仏の全体なり。 其の真性は即ち秘密総持の五字、 其の実相は即ち平等本誓の五輪なり。 17

深秘には自性法身の仏土であるとされる。 の応化であり、 は によると、 往生とされてい などと見ら 聖人 の智用とし、 一への往生を願 「今此講演 (覚鑁) 第一 . る。 これを金剛の幻と言 段に 密蔵を弘める為に第三重に現れて顕教を説くが、 等 製作の別本であるとされる。 る。 の下より書き始めて表白 同 第四段に『大日経』 作 都率天へ の 『舎利供養式』 『舎利供養式』 の上生を願 五段式 を講じ、又卒都婆を講ずるのは、 更に釈迦と阿弥陀との仏体は異なる事なく、 五段式は、 1, これも覚鑁の主張と一致するものである。 の無いものが有るとされる。 又表白は浄法房 第四段に 18 にもほ 頼瑜 『宝篋印 ぼ同文の表白があるが、 (一二二六~一三〇四) (兼海、 経 源は真言の仏であり、 を講ずる式は密厳院 一一〇七~一一五五) 後人の意楽による書き改めであり、 後人の書き改めとされる第一 これ 0) 『真俗雑記問答抄』 此土は浅略には他受用 は後 釈 0 人の 迦一 艸 が後に書き入れたもので、 本であり、 代の事跡は三 付加とさ 段 に引く 第 れ 20 但し 一密加持 一段に 兜率 には、 応化 教王院 と密厳浄· 「卒都婆十 ・往生では の浄土であるが 釈迦は法身性仏 の妙業・六大法 0) 或る古本に 土 П なく や -徳の

年五 され 賢宝 毎月 本氏 も覚鑁 徳による極楽往生を目的とした密教浄土教の信仰によるものであることが指摘できよう。 鑁作)を用いたとされる。また橋本氏は、 含利 調 またこの五段式は三 施 は されず た杲宝抄出の (一三三三~一三九八) (作の密教の 講には解 目の舍利講と、 『東宝記』 とあり、 舎 利 脱上人解脱房貞慶 0 の記事によって、 『舎利講式』 功 舎利講式』 覚鑁作 縁者・ 段に抄出されて、 徳 が 前 『舍利供養式』 が整えた三段の 故人の追善のため延慶三(一三一〇)年に頼誉律師の創始した十一月二日の舍利講があ 面 は、 が用いられたことになろう。 出 てい 奥書にも 東寺御影堂の舍利講に、 るが 五五~一二一三) 東寺御影堂の舎利講にも依用されていることが橋本初子氏によって指摘され 毎月晦日の舍利講には貞慶の五段の『舎利講式』を元に杲宝 (一三〇三~一三六二) の改作であることは明白である。 「右為自行 同 舎利講式』を用いたとされ、 .体説である事は舎利と摩尼を並べている所からも知られ Vam 作の五段 このことは、 宣陽門院 (鑁) 上人五段式内要段抄之畢 『舎利講式』 (一一八一~一二五三) この東寺御影堂 東寺観智院所蔵の写本を翻刻されているが、 これが毎月晦 を用いたとされ、 またここでは舎利と摩尼宝珠 一の舍利講 日 0 ,延文二年正月| 御願の延応二 (一二四〇) 舎利講の 霜月の が、 故 式であるならば、 公人追 舍利講 一日権少僧都 善のため は伝法院 て ń に る |舎利 年 0 こちら 氏 毎 が草、 0) 2<u>1</u> 式 貞 創 0 の 晦 始 生. (覚 刻 \mathbb{H} 0

て宿願を開発せむ。

云々 22 舎利を供養することは釈尊を供養するに同じであるという趣旨が述べられる。 若し毎月晦 日の舎利会が貞慶の 『舎利講式』を用いていたとして、 それには三種が知られるが、 中で五段の 『舎利講式』には 共通して、 釈尊没後にあって、

13 代の聖教、 は 弥勒に帰す。 或いは安養を勸め、 (中略) 帰念若し誠有らば引接各々疑いなし 或い は知足を勸む。 蓋しこれ機感の宜なる所なり。 (中略) 仰ぎ願はくは臨終微苦にして正念に安住し、 また末世の行者、 或い は弥陀に帰し、 善友来会し 或

とあって、ここには舎利の功徳による浄土往生が説かれる。 であって、 釈尊の身代りとしての舎利供養であるに過ぎない ただしその功徳は、 舎利そのものの功徳では無く、 釈尊の遺教の功徳

こには 和寺の舎利会次第を中心に検討されておられるが、 において小峰和明氏が報告された「法会から見た密教儀礼―舎利会の儀礼をめぐって―」では、『紺表紙小双紙』を中心に院政期仁 また二〇一五年九月二十日の高野山大学における日本印度学仏教学会第66回学術大会のパネル発表 往生と関わるものとして「美福門院御月忌次第」の表白が指摘されている。 「中世の密教儀礼と舎利信仰

夫れ 曼荼の差別智印を具せり。 人は罪根を凡下の心地に拔き、 .如來の舎利は遮那仏の全体にして三世に亘る。 故に芥子の比量にして微少の粧いを現ずと雖も、 南謨一念の輩は仏種を無上の福田に熟す。 眞色常寂にして、 實際を備ふ。 功能甚深なること称すを得べからず。 金剛、 平等の法身は十方に遍ず。 用を振い、 旁々莫大の益を與ふ。 性徳凝然にして $\widehat{23}$ 右 匝

とされ、 が、 有真僧都作 同様な内容を見ることができる。これらは覚鑁と同時代の院政期仁和寺における舎利会の表白であり、 毎月の忌辰に秘密真言の斎会を設け、 八条院奉為美福門院毎月舍利供養表白」 弥陀三昧の行業を修する、とされる。 No. 3 3 6 · 3 3 7 · 3 3 8 の三首) また金沢文庫所蔵の『二十二巻本表白集』に 24 が 收められることを指摘される 八条女院(一一三七~

2願わ が母である故美福門院得子(一一一七~一一六〇)追福のために修された舎利会の表白であって、 ている。 舎利の 功徳による極

してや往生は易いこととするが、 覚鑁にお いても有真においても、 直接に舎利と往生・ 舎利 (釈尊の遺身) 阿弥陀との結びつきを示すには至ってい は法身 (大日) の全体であり、 無量 一の功徳があっ ない。 て、 成仏も難く ま

五、『金輪呪王経』における如意宝珠と往ば

本において舎利の功徳による浄土往生を説く資料は、覚鑁以前には、管見の範囲、 ところで先にも述べたように、 おいては護国的な功徳に限定されていた。ただしこれらには舎利の功徳として、 インド以来の如意宝珠の功徳は直接的な現世利益といえるものであり、 知ることができない 往生の問題は述べられなかった。 それに対して二十五箇条

また『五十巻鈔』 ← 二○三)撰 かし戒光房静然 部類総録』等に記録が無く、 て、「金輪呪王経」 秘密現身成仏金輪呪王経 これに対して舎利= 『四卷』の保元三(一一五八)年三月二十八日の口決である「如意輪法」②中に「金輪と観自在と同体なり」とし (~一一四一~一一五三~)の『行林抄』(26) (3) にも引用が見られる。これからすると既に院政期初頭十二世紀前半までには存在していたことが知られる。 の内題に「仏説観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経 如意宝珠の功徳による浄土往生について説く文献に、不空三蔵(七○五~七七六) 『密教大辞典』『仏書解説大辞典』にも日本成立の偽経とされるが、 (金輪呪王経)』 25 がある。 本経も経録類を初めとして入唐諸家の将来録、 の中に「金輪呪王経」 (云云)」とあり、此の経は如意輪の経であるとしてい の名が見え、 その成立時期は確かでは無い。 また勧修寺理明房興然 安然の 訳とされる 『諸阿闍梨真言密教 如

熱悩龍 殖えず。 意宝珠品」 子経は、 王の般若水池大龍王宮に行き、 故に今、 におい 初品 に って、 我れ生を湖水中に受け女身と為る。 おいて文殊の般若窟において放鉢法を説き、 釈尊が龍宮に入ると、 如意宝珠大菩薩法を説こうと欲うと言った時に龍王が現れて釈尊を奉請する。 会中に善女という名の一龍女があり「我等、 熱悩及び諸苦患無しと雖も猶畜類鱗族の中に居す。 第二「善悪因果品」 において観自在不空王菩薩に対して、 先世の罪障深重、 願くは 貪恚愚痴にして智種を 段我れ、 次に第三「如 生生に女身 釈尊

捨てず、弥勒如来を見たてまつるを得て、 より十六大菩薩の摩頂授記をされ、 宝珠王菩薩から放たれた光に遇った六道の衆生は、 得たい衆生があれば、 と告げ、 を受けず、 を作る方法を説く。 父龍王が秘蔵する如意宝珠を如来に献ずる。 女事を作さず。 阿闍梨に従って灌頂を受けて(二十五箇条の 更に「大曼荼羅品第四」「潅頂印真言品第五」「阿闍梨成仏品第六」 仏を供養し及び聞法の力を以て、 また金剛界遍照如来は常に右手を伸べて摩頂授記し、 寿終えて後、 この身を捨てずに不壊金剛三昧を得て、 如来は法宝こそが如意宝珠であると説く。 即ち無量寿仏の極楽国土に往生することを得るとされ 皆悉く仏の微妙の道に廻向し、 『御遺告』と同じ)「人間秘密精進大如意珠玉 仏の宝冠を受ける。 覚王普賢の聖位に安住して、 が説かれ、 餘果を求めず、 また「天中龍宮福寿隨意宝珠」を 蓮華台上に安置され 唯成仏のみを期 寿命 (能作性 劫にして身を 0 切如来 た如意 如 せ

題は速疾成仏 えられよう。 舎利と如意宝珠との 十二世紀前半までには存在していたことになる。 5 から れよう。 如意宝珠の製法を説くことは、 ここに登場する 経 『法華経』「提婆達多品 と如意宝珠の問題は、 勿論、 (即身成仏) 『御遺告』との関係を考えれば、 「善女」 同体を考えれば、 であると考えられるが、 は 『御遺告』において空海が神泉苑の祈雨の時に勸請した龍王である。 天台宗における教理の影響を受けたことが考えられる。 の龍女と混同したものであり、 やはり『御遺告』を承けてのものと言えよう。 覚鑁の『舎利講式』における舎利の功徳による浄土往生説が、 成立の下限は覚鑁とほぼ同時代であり、 その成立は九五〇年以降ということになろう(2)。 同時に極楽往生を説くことは、 『御遺告』 以降の成立である証拠と言えよう。 ただ本経は経題に 密教浄土教の展開した日本における成立と考え また龍宮の どちらが先であるかは断言できない 本経で龍女とするのは、 「現身成仏」とあるように、 如意宝珠と関連させて、 本経を典拠とする可 しかし興然が引用することは またここに見られる 能性も考 能作性 そ 0 主

意輪 間 を説くことは他 觀 上のように本 音 1の経 経 軌 Ш の観音の経軌と共通する)。 の問題を考えなくてはならないが、 呵 経では舎利と宝珠 弥陀 観音との 同体説が入るのではないだろうか Ó 体説 覚鑁の の上に、 『舎利講式』 今は省略する 如意宝珠を中心として往生が には見る事 (如意輪観音の経 ができない 「軌も、 説か が、 n 観音の経軌として、 た。 舎利・宝珠と往生を結びつけるためには 如意宝珠と往生ということで その功徳に極楽往 如 願われてもいた

31

六、『覚禅鈔』における舎利と宝珠と『法華経

他 [修寺浄土院少納言阿闍梨覚禅(一一四三~一二一三~?)の !の口訣類と同様であるが、 しかし「法華秘決」の所で『法華経』「宝塔品」 『覚禅鈔』も護国的修法における舎利・ の多宝塔を多宝如来の舍利塔とし 宝珠に関する \Box 決に

に仏舎利を安ずる事、 徳正等にして差別無し。 然るに則ち釈迦多宝二仏の至極肝心は舎利に過ぎたる事有る可からざる也。 !仏舎利を安ずるを至極と為す。 左右に及ばざる事也 尤も舎利を安ず可し。 今の法は釈迦と多宝を本尊と為す。 30 又舎利即ち多宝、多宝即ち宝生、 舎利は即ち釈迦の遺身也。 なかんづく真言宗、 宝生即ち如意宝珠、 殊に東寺一 在世の生身と滅後の遺身と功 宝珠即ち舎利也 門の習ひ、 尊法

真言宗では空海が 台密でも語られている。『覚禅鈔』に記録される口訣が台密から伝わったものであるか、 に加えて『法華経』もが同体とされるに到っている。このような『法華経』の舎利と多宝如来に関する口訣は、 界では宝生菩薩を本尊として行ずるとされていたが、 宝生は宝部の部主である、とする。 本尊とする時は宝珠を本として増益である。 功徳・功能として女人生極楽・往生兜率・不堕悪趣・易産などが挙げられている。 Ō かは不明である。 『法華経 『法華経開題』 における多宝如来もまた釈迦・舎利・宝生如来と同体とされる。 ただ天台宗における口訣が詳細である事を考えると、 で阿弥陀如来・観自在菩薩の三摩地法門・法曼荼羅だとしており『法華経』 後七日御修法で東寺の舎利を安置して如意宝珠法を修するとされ、 多宝を根本とし、釈迦・多宝同座を本尊として増益に行ずる。多宝は宝生の異名であり、 法華法では、その宝生如来が多宝如来と一体とされる事によって舎利・宝珠 台密が先行するようにも思われる。 そもそも 更に釈迦を本尊とすれば息災であるが、 真言宗 『法華経』 (東密) は法身舍利 金剛界では宝生如来、 内部で作り上げられてきた による往生が盛んに 後にも見るように またここで法華法 (経典) であるが 胎蔵

七、台密における舎利と宝典

性の宝珠というものについて、 ついて記している。 執・十二宮・二十八宿・三十六禽等を囲繞して建立する。 は見られず、 に同座して坐すと想う、 二一五)はこれを尋ねて入唐した、としている(ヨ)。 一来が座し、 また時代が下るが慈眼房光宗(~一三一七~)撰 :修法の口訣などが記され、 『法華経 広沢流は能作性を相承し、小野方は所作性の宝珠を相伝しているとし、所作性宝珠は中央に金山を安じ、 四 ~ ~ 一 』を説いており、 とされる (32)。 五三~ 或る東寺の真言師の物語として述べているが、そこでは受法した西院の口訣には所作性の宝珠 「御遣告七箇条秘決」の能作性如意宝珠の記事は西院御流より伝受したものとされる(3)。 撰 また三昧耶形は釈迦が鉢であり、多宝が仏頂骨であるとされ、 更に多宝世尊の舎利宝塔が涌現して空中に懸り住 『行林抄』 0) 『渓嵐拾葉集』になると真言宗 「法華法」 また弘法大師 此れは日本には無いもので、 ではその道場観におい (空海) の作った能作性宝珠は七顆あるとされ、 (東密) て、 L 仍って建仁寺葉上僧正 宝山を霊鷲山 の口訣の記録として『御遺告』 釈迦牟尼如来と多宝仏がその宝塔 多宝如来の舎利が見られる。 と観想し、 (栄西 宝座 その所 の 七曜・ また所 や後七 兀 在 地に 。 の 九 事 作

眼 修法である、 母である Ra 字は無垢 法の根源とし、 印明を用 ・も両部理智平等の尊であるから仏眼を駄覩法の大事とする。 また天台では仏眼法を駄覩 て南方宝部を説明 また真言宗の如法愛染に対して天台宗には如法仏眼法があるというのも、 山門 いるが虚空蔵は南方宝部であり、 とする。 仏眼を舎利法の本尊とする、 (比叡山 仏眼と舎利とを結びつける口伝が円仁以来相承されているとは考えがたい 0 (清 根拠とし、 台密) 浄無垢塵の義)であるから、これを南方無垢世界と名付ける、 (舎利) には如法仏眼といい、 更にそれに 法とするとし(55)、 という。 宝部は万法能生の如意宝珠を三昧耶形とする。 『法華経』 また Ram 字を種子とするが、 如法とは普通には大法の意味であるが、 慈覚大師円仁 0 竜 また竜女は南方無垢世界において成道するが、 女成仏の (七九四~八六四) 南方無垢世界を結びつけ 真言宗において「如法」 これは如意宝珠の種子である。 とする。 の相承として兩部理智不二をもって舎利 南方は不二平等性智の方角であり、 深秘には仏舎利を安置して行ずる るの L また東寺流 は 舎利と如意宝珠の結びつきに を冠する修法を生成して 61 かにも天台宗 (真言宗) 如意宝珠の種子の字 また五大虚空蔵 では Ó 如法愛 \Box

経

体説が関わるものではないだろうか

きたことに対抗する意図が見えるように思われる。

陀抄」 らず、「舎利と弥陀と一体のこと」というのが如何なることであるか語られない。 更に三尺八角の宮殿に安置して、 峨天皇(七八六~八四二)のこと)が感得された牙舎利を相伝して、八寸の水精の塔に入れて安置し、その上に金銅の宝篋印塔を被せ、 の許へ遣った。この書は随分の秘事を書いたもので(今は)御室にある。 て入唐したという口伝を載せていることを見たが、同じ『渓嵐拾葉集』の中にあって、少しく矛盾する記録のようにも思わ ち栄西は能作性 として惣持院の建立等を挙げ、 うに思われるが、 金輪の種子)となり、 利)とし、これは如来の三密をもって(釈迦) 法を舎利とし、応身は口業を舎利とする、という。 |三三〇) のことか) が近江に入り渡りて請われるによって、弘師 (不明) が「舎利宝筐弥陀抄」 という書一巻を造って彼の禅門 また舎利と弥陀と一体のことという条目(38)が見られるが、 また「五秘密の事」 またこれに続いて金輪を舎利法と習う義についても説かれ という書名にしても、先に触れた舎利の功徳によって浄土往生をするという問題と関わるものであろうし、 東寺の大愛染は天台の大熾盛光法であり、 種々の の口伝を知っていたから、 やはり常に『法華経』 法・塵は碎身舎利であり、 の中で如法愛染法と舎利について(ホン、東寺流では如法愛染・能作性如意宝珠について天台には 諸天星宿等を示現して衆生を利益する、ともされる。これらの口決の言説は、 天台にも宝珠建立 毎日舍利講を行じた、 が問題とされる点に天台宗 材料入手のために入唐したのだ、とするのである。 また『法華経』を口業の全体 滅後の衆生を度す意である、 この三身舎利の意味は、これだけでは明らかでないが、法界の総体は法身の全身(舎 如法愛染は天台の如法仏眼であって一致する。 (能作性) という話を載せる。 はあり、葉上僧正 36 心光院禅助僧正(大伝法院座主仁和寺真光院禅助 法報応三身の舎利が示される。 (台密) としての特徴を見ることが出来ようか 彼の禅門は舎利を信ずることが人に越えており、弘仁皇帝(嵯 とされる。また釈迦如来は滅度の後に Bhrūṃ 字 ここでは「舎利宝筐弥陀抄」 (応身の全体舎利) (栄西) しかしその条目の名前からしても、 はその相応物を尋ねて入唐したとする 先に栄西は所作性の如意宝 とし、 また天台に舎利法を相承する証拠 法身は色法を舎利とし、 真言宗には無かっ 爾前の諸経を応身 の内容について触れて居 舎利と宝珠と (一二四七~ 無いこととす たも るの砕 舎利宝筐 珠を 報身は 身 (禅助 (舎 字 則

またこれに関 いわっ Ź 「御遺告七箇条秘決」 0 中 0 仏 [舎利、 身に常 に安置 L 奉る可 き事」 39 は 解 脱上人 (貞 /慶 Ŧi. Ŧi.

りたい になる。 であり、 成仏徳の十徳を挙げる。 がであろうか。 儲集功均徳。 成すとし、 (極 必ずしも広沢方の口決類を精査している訳では無いが、 国家的な祈願では無 日 製とされるが、 楽往生したい) 四に福利増長徳。 々に舎利の威光に触れることで我が身の濁闇を破し、 この十徳は一般的な如意宝珠の 今生に人身を受けて釈尊の舎利に遇い、 としている。 61 五に善神守護徳。 これ が 更に 『御遺告』に関わる口決で、 「仏舎利、 六に女人奉泰徳。 頚に懸け奉るに十徳有る事」 「願うものを意の如く与える」というものではないが、 真言宗系の口決類にはあまり見られないように思われるが 七に衆人愛敬徳。 命終の時には悪縁を絶って釈尊に発遣され、 生身で如来の色身を礼し奉ることは大慶であり、 西院流の伝であるとすれば、 には、 八に族徒昌多徳。 一に定不易徳。 本来は真言宗の相 九に不中夭死徳。 二に定業能 弥陀 個人的な禳災招福 奇特 承であること の迎接に預 転 十に決定 徳 0 思

あるともする。ここでは竜肝・鳳脳も如意宝珠になるとしており、それは過去世の福業によるものだとされる。 三大僧祇に修した福業の感ずる所の身であるから如意宝珠となるのだ、としている。 を起した果報であり、 何であるか、 |脳は如意珠となり、愚癡の故に鳥身となった。 また『往生論の注』 ⑷ に如来の遺身は海に入って如意宝珠となるという言葉を引き、 意宝珠になるのも、 そして「法華法 「大なる虚言」とされた竜肝・鳳脳が如意宝珠となる事も認めている点、 という問題について竜肝・ 私苗」 やはり如来が積んだ福業によるとしているが、これは光宗による解釈であろうか。 大善根に感じてその肝は如意宝珠となり、大瞋恚の故に竜になった。 では 『法華経』 鳳脳・ の各品について一々にその口決を語り、 如来の舎利であるとする(4)。 真言宗とは異なっているといえよう そして竜は過去の大善根の故に福業を修めたが 更に そして竜女が献ずる宝珠は竜肝の如意宝珠で 「法華法大意の事」 鳳とは金翅鳥であり、 また真言宗では の中で、 また如来の舎利が 大善根の故にそ 如 意宝珠とは

全体的にはや 言宗) また舎利が如意宝珠に変ずることは認めているが、竜肝・鳳脳が如意宝珠となる事も認めており、能作性の宝珠についても東寺流 以下は省略するが 如 、意宝珠の功能・功徳として、 はっきりとしたところは判らないが、 真言宗における護国的功能 話を伝えながら、 はり真言宗が先行しながら、 、天台宗 天台宗にも初めから伝承があったことを主張するなど、 (台密) において如意宝珠を言う場合、やはり『法華経』に登場する宝珠が問題になっているようであ それを天台宗が吸収し、 そこに天台宗的な改変を加えていったように思わ 真言宗に対する対抗意識を認めることができる。 (請雨といった国家的 禳災招福 れ

ではなく、 本来の如 意宝珠の功能といった面で受け取られているように思われるが、 どうであろうか。

八、おわりに

たことを主張する。 宝珠同体説を『法華経』と結びつけて解釈する傾向が強く、 としての功能 の居る室生山 通念であった。 「家的役割よりも、 以 禳災招! 美 日 福のための修法) 本密教における舎利と宝珠についての言説の一端を垣間見てきた。 は、 の如意宝珠が、 その如意宝珠の果たす役割が、 釈尊滅後の衆生済度のために、 どちらかといえば受持供養する個人的な功能の側面が表に現れているような印象を受ける。 またその功徳・功能においては如法仏眼法・熾盛光法などの国家的御修法の問題もあるが、 の役割を持つようになり、 龍に代わって善風を出して五穀豊穣ならしめ衆生利益するという護国的修法 真言宗 浄土往生の功徳を示す展開も見せている。一方で天台宗(台密) (東密)では空海の作とされた『御遺告』において、 本来の如意宝珠の功能とは異なるものへ変っていった。 また真言宗に対抗して、天台宗にも当初から舎利法・如法仏眼法 舎利が如意宝珠に変ずることは、 (国家的な安寧を得るた 祈雨の霊地とされた龍 しかし一方で舎利 真言宗の主 インド仏教以来の では舎利= 張する のあっ 如意

心であったように思われる。 少し難しいかも知れない。 影した結果とみることができるのではないだろうか。 るように思われる。 舎利の功徳として往生が説かれたが、 また密教における舎利の功徳による浄土往生の問題については、 [の本地が阿弥陀だからであろう)。このような往生觀は、 不動と愛染を脇侍とする三尊合行法の本尊も、この関連の中で理解されよう またそこには宝珠と『法華経』、宝珠と如意輪観音、 それ以外では、 ただし覚鑁の『舎利講式』 舎利と如意宝珠との同体説の上に、 やはり『法華経』 覚鑁の『舎利講式』や美福門院追福の舎利会の表白では、 信仰的密教浄土教の中に、 が 『法華経』と阿弥陀と観音との同体説が背景にあ 『金輪呪王経』より早かった場合、 宝珠の功徳として往生を説くことが中 (八幡の脇に不動・愛染を置くのは 舎利と宝珠の同体説を投 その説 崩は 法身

註

2 $\widehat{\mathbb{I}}$ 内藤栄 一厳美術 『の研究』平成22年3月 行史出版刊、 および同 「日本の美術」 No. 5 3 9 『舎利と宝珠』平成23年4月ぎょうせ い 刊

意宝珠の問題は関説されているが、今は省略する。 意宝珠の問題は関説されているが、今は省略する。 第15号平成25年3月。その他の論考については村上論文の註2に挙げられている。まについて〈その問題と相承・造作法〉」『密教学研究』第45号平成25年3月。その他の論考については村上論文の註2に挙げられている。まに知り生成一『宀一山縁起』を中心として―」『國語國文』第71巻1号(通巻809号)平成14年1月中央図書出版刊。村上泰教「能作性起類の生成―『宀一山縁起』を中心として―」『國語國文』第71巻1号(通巻809号)平成14年1月中央図書出版刊。村上泰教「能作性起類の生成―『宀一山縁起』を中心として―」『國語國文』第18号平成17年2月。藤巻和宏「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と宀一山縁密教の修法と如意宝珠」『高野山大学密教文化研究所紀要』第18号平成17年2月。藤巻和宏「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と宀一山縁密教の修法と如意宝珠、高野山大学密教文化研究所紀要』第18号平成17年2月。藤巻和宏「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と宀一山縁密教の修法と如意宝珠、信仰〉」智山勧学会編『中世の仏教―頼瑜僧正を中心として―』平成17年5月青史出版刊。同「真言中村本然「真言密教における如意宝珠〈信仰〉」智山勧学会編『中世の仏教―頼瑜僧正を中心として―』平成17年5月青史出版刊。同「真言

3 平成22年10月10日竹林舎刊。 拙論「空海撰述の「祖典」な 化をめぐって―空海第三 一地菩薩説と 『御遺告』 0 が成立 中世文学と隣接諸学2『中世文学と寺院資料・ 聖教

 $\widehat{4}$ 武内孝善 「『御遺告』 の成立年代 -堅恵関 |連の史料を中心として」 『密教学研究』 第43号平成23年3月

5 『弘法大師全集』第 一輯 8 0 3 — 8 0 7 頁·『定本弘法大師全集』 第七巻 370 ―374 頁・『弘法大師伝全集』 第一 巻20頁上 21頁下

 $\widehat{\underline{6}}$ 『大正蔵経』第28巻 127 頁c

7 『大正蔵経』 第25巻 316 頁 b

8 『大正蔵経』第25巻 478 頁 a b

9 『弘法大師伝全集』第 巻 91 頁上

10 中村本然「真言密教の修法と如意宝珠」 『高野 山大学密教文化研究所紀要』 第 18号平成17年2月

 $\widehat{11}$ 『大正蔵経』 第78巻 506 頁 b

12 『大正蔵経』 第78巻 274 頁 C

13 『大正蔵経』第78巻 7 0 0 頁 a

14 『大正蔵経』 』 第 7 8 巻 618頁c・ 『群書類従』第2輯 691 頁下 692頁 Œ

15 後潅頂常行心要法』について」平成20年3月ノンブル社刊拙著『平安期真言密教の研究』第二部「平安期の真言教学と密教浄土教」 第二編 「院政期の真言密教 密教浄土教をめぐって―」第六章「『最

16 大正蔵経』第78巻116 頁 a

17 『興教大師全集』下 $^{1}_{2}_{7}_{7}_{1}$ 2 7 8 頁

18 興教大師全集』下 1282 頁

19 『真言宗全書』第37巻 324 頁下 3 2 5 頁 Œ.

- 20 『興教大師全集』下 1285—1286 頁
- 21 橋本初子『中世東寺と弘法大師信仰』平成2年11月思文閣出版刊

23

22 山田昭全・清水宥聖編『貞慶講式集』29頁、 平成12年8月山喜房仏書林刊

仁和寺紺表紙小双紙研究会編『守覚法親王の儀礼世界―仁和寺紺表紙小双紙の研究―

24 成12年10月勉誠社刊 阿部泰郎・福島金治・山崎誠編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』【資料編・金沢文庫蔵御流聖教】 520 頁上―522 頁 上。

本文編2』914 頁下。

平成7年2月勉誠社

平

- 25 『大正蔵経』No・961、 『大正蔵経』第19巻 330 頁 b-334 頁 С
- 確かでは無い。 『大正蔵経』第76巻 295 頁 a。ただしここで「金輪呪王経に云く」として引かれる文が今の『金輪呪王経』には見られず、 何を指すか
- 27 『大正蔵経』第78巻 812 頁 a
- 『真言宗全書』第30巻 264 頁下

28

26

- 30 29 平成22年10月10日竹林舎刊。および武内孝善『御遺告』の成立年代 ・・堅恵関連の史料を中心として」『密教学研究』第43号平成23年3月拙論「空海撰述の「祖典」化をめぐって―空海第三地菩薩説と『御遺告』の成立―」中世文学と隣接諸学2『中世文学と寺院資料・聖教』
- 『大正蔵経』図像第4巻 634 頁c
- 31 拙著『平安期真言密教の研究』第二部 されたい。 「平安期の真言教学と密教浄土教」 第四篇 「往生伝と密教浄土教」 平成20年3月ノンブル社刊を参照
- 32 『大正蔵経』第76巻 1 2 2 頁 a b
- 33 『大正蔵経』 第76巻 543 頁 C
- 34 『大正蔵経』第76巻 545 页 b
- 35 「第三仏眼法事 秘曲」 は『大正蔵経』 第76巻 554 頁 a

- 36 『大正蔵経』第76巻 556 頁 b
- 37 『大正蔵経』第76巻 578 頁 C 5 8 8 頁
- 38 『大正蔵経』第76巻 546 頁 a
- 39 『大正蔵経』第78巻 543 頁c-54 $\overline{4}$ 頁
- $\widehat{40}$ 『大正蔵経』 第 76 巻 6 0 0 頁 a
- $\widehat{41}$ 生福盡。此舍利變爲摩尼如意寶珠。曇鸞「無量壽經優婆提舍願生偈註」 此珠多在大海中。大龍王以爲首飾。若轉輪聖王出世。以慈悲方便能得此珠。於閻浮提作大饒益。若須『大正蔵経』第40巻 836 頁 b には次のようにある「諸佛入涅槃時。以方便力留碎身舍利以福衆生。 若須衣

爾時即便於虚空中雨種種物。皆稱所須滿足天下一切人願。以此寶性力故」 服飲食燈明樂具隨意所欲種種物時。王便潔齋置珠於長竿頭發願言。若我實是轉輪王者。願寶珠雨如此之物。若遍一里若十里若百里隨我心願。